

前田利家と金沢城

●前田利家は加賀百万石前田家の祖です。尾張荒子(現名古屋市中川区荒子町)の土豪前田利昌の四男として生まれ、織田信長に従い、大名としての基を築きました。幼名犬千代、前名又左衛門。武勇の誉れ高く「槍の又左」の異名があります。 ●豊臣秀吉とは犬千代時代からの交わりです。信長時代には、近江長浜、越前府中、能登七尾の城主となりましたが、秀吉と柴田勝家の戦いの後、秀吉と提携し、天正11年(1583)金沢城に入城しました。 ●金沢城は、寛永8年(1631)の火災以降、本丸の機能が次第に二の丸へと移されました。菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓の形体もこのころに整備されたと考えられています。17世紀の終わりころには、二の丸は「千畳敷の御殿」と呼ばれるほど壮麗な建物となっていました。そして、宝暦9年(1759)の火災を機に、完全に本丸から二の丸中心の城へと変化したのです。二の丸の建物は宝暦9年(1759)、文化5年(1808)の二回大きな火災を受け、そのつど再建され、明治期まで存続しました。

金沢城菱櫓等復元要旨

●菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓は資料に基づき史実を尊重し、文化6年(1809)に再建された形に復元し、日本古来の伝統工法により建設しました。構造は柱と梁・桁による木造軸組と土壁・貫を組み合わせた耐力壁によって構成し、部材の接点は継手や仕口を用いて緊結を図っています。明治以降の木造城郭建築物としては全国的にも大規模なもので、建物の耐用年数は200~250年を想定しています。また、現代工法として、鉄筋コンクリートの基礎やスプリンクラー設備等を設置し、さらにバリアフリーを考慮した階段昇降機、エレベーターを設けています。

金沢城建築関係略年表

1546 (天文15)	金沢御堂(尾山御坊)小立野台地に創建。
1583 (天正11)	前田利家、石川・河北両郡を豊臣秀吉より拝領し、金沢城入城。文祿の役。金沢城大修築。
1592 (文祿1)	百間堀(蓮池堀)、いもり堀、白鳥堀等堀る。落雷により天守、本丸の建物焼失。
1602 (慶長7)	金沢城火災、本丸御殿焼失。
1620 (元和6)	本丸御殿再建。(四月)
1621 (元和7)	金沢城下大火、城内本丸御殿類焼。
1631 (寛永8)	橋爪門創建。
1632 (寛永9)	二の丸御殿造営。辰巳用水ができる。
1642 (寛永19)	金沢城北の丸に東照宮造営。
1759 (宝暦9)	金沢城下大火災、城内ほぼ全域焼失。
1762 (宝暦12)	二の丸御殿・橋爪門成る。石川門普請開始。
1788 (天明8)	石川門成る。
1808 (文化5)	二の丸御殿より出火。菱櫓等焼失。
1809 (文化6)	二の丸御殿上棟式。橋爪門造営成る。五十間長屋完成。菱櫓・築屋多門造営。二の丸御殿成る。
1810 (文化7)	松平定信、兼六園の額を書す。竹沢御殿成る。
1822 (文政5)	竹沢御殿庭に泉水成る。霞ヶ池を掘る。
1837 (天保8)	金沢大地震。本丸三十間長屋上棟式。
1858 (安政5)	二の丸御殿、橋爪門、五十間長屋等焼失。
1881 (明治14)	菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓復元。
2001 (平成13)	河北門、いもり堀復元。
2010 (平成22)	橋爪門、玉泉院丸庭園復元整備。
2015 (平成27)	鼠多門復元、鼠多門橋完成。
2020 (令和2)	二の丸御殿復元整備工事 着工。
2025 (令和7)	



石川県金沢市・兼六園管理事務所 〒920-0937 金沢市丸の内1番1号
TEL. 076-234-3800 FAX. 076-234-5292
<https://shiro-niwa.pref.shikawa.lg.jp>

お問い合わせ



- 交通のご案内
 - バス/「兼六園下・金沢城」下車 徒歩10分 石川門口
 - バス/「兼六園下・金沢城」下車 徒歩10分 玉泉院丸口
 - バス/「尾山神社」下車(尾山神社経由)
 - 徒歩10分 鼠多門口
 - タクシー/金沢駅西口から約10分
 - 自動車/北陸自動車道金沢西インターから約30分
 - 北陸自動車道金沢森本インターから約20分
- 入館のご案内
 - 開館時間/AM9:00~PM4:30(最終入館PM4:00)
 - 休館日/年中無休
 - 入館料/大人(18歳以上) 320円(団体250円)
 - 小人(6歳以上18歳未満) 100円(団体80円)
 - ※団体は30人以上



金沢城公園 菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓・橋爪門





菱櫓

二の丸で一番高い三層の物見櫓。尾坂門、河北門、石川門を一望できる。石落しを多く持ち、実戦的で、なおかつ華やかな櫓。

橋爪門続櫓

二の丸大手の橋爪門枳形に付随する三層の物見櫓。三の丸で戦闘が起きたときの指揮所。

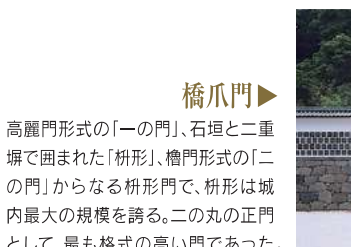


五十間長屋

菱櫓と橋爪門続櫓を結ぶ二層の多間櫓。普段は倉庫として用いられるが、非常時は戦闘のための砦となる。石落しを各所に備え、格子窓は鉄砲狭間となる。

鶴の丸土塀

土塀の三の丸側の腰部は海鼠壁で覆われている。鉄砲狭間は隠し狭間で、通常は海鼠壁の板瓦でふさがれている。塀の内部には小石が詰められている。



橋爪門

高麗門形式の「一の門」、石垣と二重堀で囲まれた「枳形」、櫓門形式の「二の門」からなる枳形門で、枳形は城内最大の規模を誇る。二の丸の正門として、最も格式の高い門であった。



橋爪門一の門



橋爪門二の門

展示物リスト

- ① 壁断面展示(透視展示)
- ② 城内の発掘調査(出土品展示)
- ③ 石落し
- ④ 金沢城再現模型(1/500)
- ⑤ 海鼠壁断面模型
- ⑥ 屋根軒部分模型
- ⑦ 木組模型(土台・柱部継手)
- ⑧ CGモニター
- ⑨ 菱櫓等軸組み模型(1/10)
- ⑩ 菱櫓柱脚部展示(透視展示)
- ⑪ 木組模型(菱櫓)

赤字:1階 青字:2階



伝統木造工法

日本に古くから伝わる木造軸組みの工法。柱・梁を組み合わせ、小屋を架ける。柱は桧、角梁は米ヒバ、小屋梁には松丸太を用い、他に能登ヒバ、赤杉など県産材を用いている。使用した木材6,190石の約7割の4,221石が県産材。



出窓

石垣をよじ登る敵を防ぐために設けられた。出窓床板を開き石を落す。三面の窓は鉄砲狭間となる。

復元整備の概要(建築物)

区分	菱櫓	五十間長屋	橋爪門続櫓	橋爪門	鶴の丸土塀
規模	木造三層三階建 入母屋造り 唐破風石落し付 鉛瓦葺 海鼠壁及び 総漆喰塗込壁 屋根高(石垣上) H=17.34m 延べ床面積 A=255.35㎡	木造二層二階建 入母屋造り 唐破風石落し付 鉛瓦葺 海鼠壁及び 総漆喰塗込壁 屋根高(石垣上) H=9.35~10.08m 延べ床面積 A=1384.95㎡	木造三層三階建 入母屋造り (一部寄棟造り) 唐破風石落し付 鉛瓦葺 海鼠壁及び 総漆喰塗込壁 屋根高(石垣上) H=14.69m 延べ床面積 A=253.93㎡	【一の門】 高麗門(脇廊付) 鉛瓦葺 屋根高(石垣上) H=7.03m 門幅 W=4.62m 【二の門】 櫓門 入母屋造り 屋根高 H=12.78m 門幅 W=14.36m 【枳形二重堀】 切妻造り 矩折延長 46.96m (出し含む枳形内側) 延べ床面積 A=136.18㎡(41坪)	土塀(二重堀) 木芯土塀柱付 唐破風石落し・ 鉄砲狭間付 鉛瓦葺 屋根高(石垣上) H=2.91m 延長 L=62.12m
	延べ床面積 A=1,894.23㎡(573坪)				



床下軸組および壁の透視展示

菱櫓一階の床下部分と二の丸側壁面部分にガラスを入れ、内部に隠れた部分の様子が分かるよう工夫されている。